

新たな時代の理性主義と「安全・安心」
(書評 “哲学の最新キーワードを読む”)

藤居 学 (AIG 総合研究所主任研究員)

哲学の最新キーワードを読む 「私」と社会をつなぐ知

講談社現代新書, 講談社 2018

著: 小川 仁志

第一部 感情の知

- 1 政治は感情に支配されるのか?——ポピュリズム
- 2 地球規模の宗教対立が再燃する——再魔術化
- 3 アートこそが時代を救う——アート・パワー

第二部 モノの知

- 4 すべては偶然に生じている——思弁的实在論
- 5 独立するモノたち——〇〇〇
- 6 非-人間中心主義の行方——新しい唯物論

第三部 テクノロジーの知

- 7 AIの暴走を止められるか——ポスト・シンギュラリティ
- 8 インターネットが世界を牛耳る——フィルターバブル
- 9 プライバシーなき時代を生きる——超監視社会

第四部 共同性の知

- 10 積極的な妥協が対立を越える——ニュー・プラグマティズム
- 11 ポスト資本主義社会は共有がもたらす——シェアリング・エコノミー
- 12 自分と他者を同時に幸福にする——効果的な利他主義

本書は、理性主義が限界を露呈する一方、「次」の価値観がまだ提示されない現代の混沌を、公共哲学（人と社会との関係をテーマとした哲学）という立場から解説し、いくつかのキーワードを足がかりに、“理性そのものをアップグレードする”という試みです。

世界的なポピュリズムの台頭や宗教対立の再燃、さらには「ポリコレ*¹ 疲れ」といわれるような社会の動勢は、“理性主義への懐疑”に他ならない、と本書は位置づけます。

*¹ ポリティカル・コレクトネスの略。差別や偏見が含まれない、公平・公正な表現や用語を使うことを社会の規範としようとする運動や立場のこと。

ヒトには合理的に思考し判断ができる「理性」が先天的に備わっており、そのような理性こそがヒトを他の動物とは異なる唯一無二の存在たらしめているという「理性主義」は、ルネッサンス以後の近現代、特に西洋の社会において普遍的な価値観であり続けてきたと

いわれています。

ところが、理性主義が台頭するきっかけとなった自然科学・社会科学の発達で、逆にヒトは必ずしも理性的な存在ではないことを証明してきました。

たとえば心理学では、ジークムント・フロイトが“無意識”という概念を「発見」し、ヒトの行動の原因は必ずしも自身が意識していることにあるとは限らないことを示しました。また、シカゴ大学のリチャード・セイラー教授が2017年のノーベル経済学賞を受賞したことで改めて注目された行動経済学においても、ヒトの判断は単純な計算式で定まる合理的なものではなく、感情や文脈によって変動する複雑なものだということが理論の根幹にあります。

これらが示しているのは、ヒトは基本的には理性的な存在ではあるもののそれがすべてではなく、どんなに突き詰めていっても、むしろ突き詰めていけばこそ、最後には非合理的な感情や直観が消し去りがたく残る、ということでしょう。

“こうした諸現象は、「我思う、ゆえに我あり」というデカルト以来の理性主義、そしてヘーゲルで頂点を極めた絶対知に象徴される理性中心の西洋哲学全体の終焉と見ることもできる。”

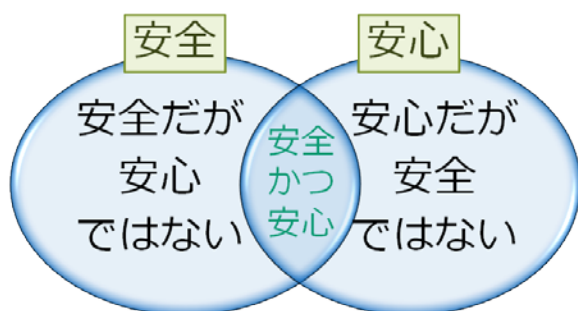
“だとすると、何が時代を規定する物差したりうるのか？ それはまさにこれまで述べてきた脱理性主義的な現象すべてである。つまり、従来の理性主義にとって代わろうとしている脱理性主義の多層的な知が、全体として時代を規定しようとしているのだ。”

(本書5～6ページ、傍点著者)

新しい時代を規定する多層的な知＝“多項知”として、著者は「感情、モノ、テクノロジー、共同性」の四つをあげます。その四つがそのまま本書の四部構成となっていますが、思弁的な実在論を取り扱っている純哲学的な第二部を除けば、欧米の反グローバル政策や世界の宗教対立、人工知能、シェアリング・エコノミーといった身近な話題をとりあげており、哲学書としては読みやすいものとなっています。最終的に本書が提示する「解」はやや理想主義的にも感じますが、そこは本書をきっかけとして、読者が思索を深めていくべき部分なのでしょう。

AIG総研がテーマとする「リスク」についても、同様の問題意識とアプローチが必要だと考えています。

「危険」の反対語とは、何でしょうか？ リスクの客観的実態に関してであれば「安全」ですが、私たちの主観的なリスク認識についていうなら、それは「安心」になるでしょう。「安心」は、客観的知識というよりもむしろ感情に近いものです。



「安全」と「安心」の関係

あるリスクに対して、適切なリスクコントロールによってより安全な状態を目指すことが何より重要なのはいうまでもありませんが、同時に、適切なコミュニケーションによってその「安全」を「安心」につなげていくことも欠かせません。リスクコミュニケーションの重要性は食品業界や医療業界では既に意識されていることですが、これからは他のリスクについてもより重要なものとなっていくと考えられます。

このような、安全と安心の「ずれ」もふまえたリスク認識・意思決定、そしてリスクコミュニケーションについて、先に触れた行動経済学やリスクの社会心理学といわれる分野の最新の知見もふまえ、情報発信し議論を提起していきたいと私たちは考えています。

※本ドキュメントは保険もしくはその他一切の金融商品の販売を意図したものではありません。また、本ドキュメントは具体的な特定の取引をご提案するものではなく、その実現性を保証するものでもありません。

※AIG 総合研究所(以下「AIG」と呼びます。)は、本ドキュメントの利用あるいは利用の結果に関して、その正確性、精度、信頼性などについていかなる表明および保証も行わないものではなく、その利用の結果については責任を負いません。AIG は、本ドキュメントがいかなる場所においても適切であり利用可能であることを表明するものではありません。AIG は、正確かつ最新の情報を本ドキュメントで提供しよう合理的な努力をしていますが、誤差・脱漏が生じる場合があります。

※AIG あるいは本ドキュメントの企画、作成または提供に関わるいかなる当事者も、お客様が本ドキュメントを利用したことあるいは利用できなかったことに起因する直接的、偶発的、結果的、間接的損害あるいは懲罰的賠償の責任を負うものではありません。

※本ドキュメントに掲載されている内容に関する権利は、AIG および AIG が利用許諾を得た著作権者に帰属します。無断で転用・複製・改変をすることはできません。